

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年11月22日(火)

### 《終末観 ～出会う全てのものを大切に～》

今日の福音(ルカ 21:5 - 11)にあるとおり、エルサレムの見事な聖殿は破壊されました。イエス様の言葉が予言のようになったことは、歴史的に分かっています。私たちは、この福音を読んで、何を考えなければいけないのでしょうか。

歴史を振り返ってみますと、大きな戦争が起こったり、感染する病が流行したり、地震が起こったり、川が氾濫して村が沈んだり、理由の分からないことによってたくさんの被害が起こった時、いつも生じるのは終末の話です。そして必ず、「世の終わりが近づいた。」と叫ぶ声がありました。

たとえば今日の福音で話されているように、「私がキリストだ。私について来れば救われる。」と叫ぶ者が必ずいました。今の時代でも全く同じです。テレビでも、「このような話をした人がいるが、その人の言ったことは今まで全部当たっていた。だからそれは、実際に起こるかもしれない。」というとんでもない話を流しています。そして、その話を聞いた人々が興味を持ち、「本当ではないか」と、おびえる姿を見せています。

では、私たちはどのような気持でこの福音を理解すればよいのでしょうか。皆様は、本当にこの世界が終末に近づいて行くと思いますか。今の時代は、今日の福音で紹介されたようないろいろな印が全部現れています。国々が敵対して、相手を倒すことばかり考えています。地震やいろいろな自然災害も起こっています。そのようなことを考えると、終末ではないかと思ってしまう。「倫理的に墮落したからこのようになった。」と言う人もいます。

まず、私たち信者が、『終末』という言葉をもとに福音的に理解しなければなりません。終末という言葉の一番福音的な解釈は、「生きていることが死んでいること」ということです。生と死を別の世界と見ないで、生の延長線上に死があると考えます。「今生きているこの瞬間が最後になるかもしれない。だから、この生き方に最善を尽くさなければいけない。この短い瞬間でも、生きる意味を探さなければいけない。」と考えることです。たとえば、「私は最後のミサに与っているのかもしれない。だから、100パーセント集中して、感謝しながらこのミサを捧げなければいけない。」という心が信者としてふさわしい終末観だと思います。

今日の第一朗読では、ダニエルの預言(ダニエル 2:31 - 45)が読まれましたね。ダニエルの預言や新約聖書の黙示録のような話を『黙示文学』と呼びます。旧約聖書でも新約聖書でも、普通では使われないような神秘的で全く意味の分からない用語を使う文学のことです。その黙示文学に共通するメッセージはただ一つです。それは、「全ての時間が神様のみ手にある」というものです。意味深い内容です。私たちの生も死も、生と死が出会う瞬間にまた新しい生が与えられるのかそれとも永久<sup>とこしえ</sup>の死が与えられるのかも、全てが神様のみ手にあるのです。人間があれこれ言えることではありません。これは、今日の福音に通じる話です。もちろん私たちが今のような墮落を続ければ、現実的に世の

終わりが近づくかもしれません。飢えて死んでしまう子どもたち、罪もないのに親の利己心のためにお腹で殺される子どもたちが増え続け、自分のことばかり考えて相手の命を奪おうとする心が広がり続ければ、世は終わるしかありません。これは現実のことです。

しかし、それより考えなければいけないことは、「私たちはいつも終末の世界で生きている」ということです。生と死は別々の世界ではなくて、私たちはいつも死を考えて生き、生きながら死を思うのです。そういう調和が何よりも必要なことを意識しなければなりません。

ある意味では、私たち信者にとって、生きていることが死んでいること、死んでいることが生きていることなのかもしれません。少し哲学的な考え方ですが、易しい単純な論理です。今私たちが生きている間に会う全ての関わり、時間、それを大事にしなければいけないのです。そういう気持ちで生きる人は、死が恐ろしいと思わないでしょう。なぜならば、私たちにとっては、死はある意味の希望だからです。これは、「自ら命を絶ちなさい」ということではありません。死は入り口なのです。今私たちが悩んでいる全ての苦痛から解放される約束された国への入り口なのです。だから、希望的に見なければいけないのです。しかし、上手な生き方をしていなくて、神様のみ言葉に従うことが出来なければ、やはり死は怖い存在として、いつも私たちの心に残ると思います。

終末論的な理解がなくては絶対にこの世のまことの美しい喜びを体験することができないことを意識しましょう。

ありがとうございました。